



国民の祝日

佐佐木 邦子

子どものころの一番の遊び場は、お寺と、その後ろに広がっているお墓だったように思う。私だけでなく、近所の子もたちが群れて遊んでいた。石の上でトカゲが日向ぼっこしていたり、墓石の間にホタルブクロがひっそり咲いていたり、少し奥の崖になっているところで熟した桑の実を見つけたり。冬になると、供えてある花竹を盗んできて竹スキーを作る強者までいた。

植物の名前を覚えたのも、穴ゼミを取ったのもみんなお寺だった。お葬式やお彼岸など、人がたくさん集まる日に遊ぶのは悪い、という程度の認識はあったが、怖いとか気味悪いとか思ったことは一度もない。死んだ人が眠っていると聞かされても、恐ろしがる子どもは誰もいなかった。

ヨーロッパでは生と死は越えることのできない絶対的な違いだが、日本では最近までごく近かった気がする。季節の変化が自然なように、ご先祖様も自然だった。田畑を暮らしのベースにしてきた農耕民族だ。人間の力を越えた大いなるものと共存しないことには、農耕民族などやっていられない。大いなるもののトップがご先祖様で、死んだご先祖様はときどきこの世に遊びに来る。子どもも生活に隣り合った死の当たり前さのようなものを漠然と感じていて、怖いと思わなかったのだと思う。

「国民の祝日」という言葉が生まれるずっと前から、お盆やお彼岸は日本人全部の特別な日だった。生きている人々は、遠くからやって来るご先祖様のために、ご馳走を作り、お墓を掃除して花を飾る。ご先祖様が来る日に合わせて、遠くで暮らしている家族や親戚も戻ってくる。ご先祖様が遊びにくる日を国民全部の祝日に定めて、誰も不思議に思わない。

日本列島が丸ごと動く。何ごとにも合理的なはずの現代人が、お盆やお正月には郷里に帰るものだと何と

なく思っているらしいのは、遠い昔からの遺伝子のよ
うなものではないのか。今はよくわからなくなっ
てしまったが、お正月だって先祖供養の意味があ
った。

お彼岸にお墓参りしたとき、ビニールを広げてお
弁当を食べている家族連れを見かけた。そう言え
ばほんの少し前まで、持っていった食べ物を一
度お墓に供えてから下ろし、その場で食べてく
る風習があった。ご先祖様との共同飲食だ。「お
墓のアリって超おっきいよ!」母親を見上げて
子どもが叫ぶ。近所の子もが墓石でかくれんぼ
しなくなっても、季節の変化は真っ先にお墓に
現れ、虫と仲良くしたがる子どもは絶えない。
殺伐とした事件が多い昨今だが、ご先祖様を
媒介に家族や親戚がつながっている間は、ま
だ安心できそうな気がする。

2006.6 こもれび第1号